

戦後移住の原点を訪ねて

和歌山県中南米交流協会副代表・紀南支部長

眞沙 睦

記念式典出席へ

4月27日、サンパウロ市で「ブラジル和歌山県人会連合会創立60周年記念式典」が開催された。和歌山県からは仁坂吉伸県知事、山田正彦議会議長をはじめとする県議団、県庁関係者、ビジネスミッション、それに民間訪問団を合わせて75名の大型慶祝団が訪伯した。

私たち和歌山県中南米交流協会も、記念式典への出席を兼ねたブラジルツアーを組み、和歌山本部から18人、紀南支部から13人が民間慶祝団として式典に出席した。

現地からは木原好規ブラジル和歌山県人会連合会会長（紀の川市出身）をはじめとする県人会幹部、和歌山県出身の親をもつ日系政治家（連邦議員、サンパウロ州議、サンパウロ市議）、それに県からの移住者とその子弟ら約500人がブラジル各地から集まって盛大な式典が行われた。



記念式典で挨拶する木原会長

挨拶に立った木原会長は「60年を経た今日、人生にたとえればこれからが出発点です。世代は変わっていきますが、紀州人としての誇りを持って互恵の精神を深め、母県と県人会、ひいては日本とブラジルの親善と交流が一層発展するよう努めます」と締めくくられた。

仁坂知事は、先に訪問した南マットグロッソ州ドラードス市のことにふれて「開拓時代の厳しい環境条件の中でも県人移住者が子弟教育に力を注ぎ、ブラジルの国力を高めてきたことに、同じ和歌山県人として誇りに思う」と移住者をたたえた。

サンパウロ州、サンパウロ市の県人子弟議員の方々の祝辞が述べられた後、真砂充敏田辺市長からの祝辞が披露された。祝辞は「和歌山県から最初の移民団がブラジルに上陸されたのは1917年（大正6年）、また戦中途絶えていたブラジル移住が1953年（昭和28年）に再開され、御地には1416家族、5819人の同郷の皆さまが移住された」という具体的な史実に言及し、ブラジル社会で「日本人は信頼できる」という評判を勝ち取った経緯にふれた。内容が充実していたため、周りの日系人の方々は感慨深そうに聞かれていた。

式典後の懇親会では、あちこちで賑やかな歓談の輪ができ、参加者一同交流を楽しんだ。

開拓の最前線、ドラードス市へ

サンパウロ市での式典に先立つ4月24日、25日に、戦後移住した多くの和歌山県人が住んでいる、南マットグロッソ州ドラードス市が主催する歓迎晩さん会と、南マットグロッソ州和歌山県人会主催の歓迎祝賀会が催された。それに出席するため、ビジネスミッションを除く私たち54人が、サンパウロ市から西に1500キロほど離れたドラードス市まで、飛行機と車を使い移動した。

初めて和歌山県知事一行を迎えるというので、4月24日夜、市が盛大な歓迎式典を催してくれた。席上、市長と市議会議長は異口同音に「ドラードスが今日あるのは、和歌山県の方々がジャングルを切り開いてくれたからだ。日本移民は農業はじめ、社会経済に多大な貢献をした」と県出身移住者を称えた。



ドラードス市議会での歓迎式典

原生林を開拓し、この地一帯を大豆やトウモロコシの一大生産地に変える歴史的な事業を引っ張ったのは和歌山県人だが、それでも市をあげて特定の移民集団の歓迎祝賀会を催すのは異例のこと。地域の和歌山県人、ひいては日本人への信頼の厚さを物語るひとこまだった。

式典後、谷口史郎南マットグロッソ州和歌山県人会長（みなべ町清川出身）から市長に紹介してもらい、私が田辺市から預かった田辺市の観光用DVDを手渡した。席上、市長から「来年には和歌山県を訪ねたい。その際、ドラードスに多くの移住者を送り出して

くれた田辺市との交流も図りたい」との発言があった。

私が熊野古道の概要を説明したところ、熱心に聞いてくださった。「ぜひ田辺にも足をはこんで頂いて、熊野古道を散策して下さい」とお願いしておいた。



ドラードス市長（右）、谷口会長（中央）と歓談

「松原入植地」を訪問

25日早朝、大型バス3台を連ねて、ドラードス市郊外の「松原入植地」で、娘さん夫妻と一緒に、今もお元気で牧畜を営んでいる那須千草さん（田辺市三栖出身）宅を訪問した。今では入植当時の原始林は姿を消し、広い牧場でのどかに牛が草を食んでいた。



那須千草さん（田辺市出身）宅を訪問

断片的だったが、千草さんから入植当時の話を聞き、開拓時代の生活の一端にふれることができた。

「松原入植地」は終戦直後、時のヴァルガス大統領との特別な関係を足場に、みなべ町岩代出身の戦前移住者・松原安太郎が日本人移住再開の許可を取り付け、戦後初めて56家族の和歌山人を入植させたゆかりの地である。同時にそれは、戦後の日伯外交関係修復の出発点ともなった歴史的舞台でもある。

その和歌山人戦後移住の原点である「松原入植地」を初めて県知事が訪問した。民間の交流に加えて自治体同士の交流も交えて母県との絆を太くしたいという、現地和歌山人たちの長年の念願がやっと第一歩を踏み出した。県人会の皆さんは感慨ひとしおであろう。



仁坂知事から感謝状を受けた谷口会長とご家族

引き続き、ドラードス日系文化会館で催された南マットグロソ州和歌山人会主催の歓迎祝賀会に出席した。

日本から54人もの県人が、かつての開拓前線、ドラードスまで足を運んだことにたいして、谷口会長は「初めて県知事、県会議長をお迎えし、また大勢の慶祝団の皆さんも出席頂いて言葉にできないほど嬉しい。心から感謝する」と謝辞を述べた。

仁坂知事は「ドラードス市の歓迎の席で、我々が今日あるのは、和歌山県の方々が努力をして原生林を切り開いてくれたからだ、と言われたのを聞き、県民として大変誇りに思った。正直、勤勉、そして忍耐、そうした日本人の美德を皆さんがブラジルの社会で十分発揮され、今日を築かれた。我々は皆さんを心から誇りに思い、たたえたい」と祝辞を述べた。

その後、長年にわたる県人会活動と日系子弟の日本語教育支援の功績をたたえて、県知事から谷口会長に感謝状が贈呈された。

現在、州内には県人とその子弟が約300家族いるそうだ。祝賀会には200人を超す方々が出席した。

式典後の懇親会では、婦人部の方々お手製のごちそうが並べられた。「ブラジルではサンマが手に入らないので、かわりにイワシを使ってスシを作りました。紀州のサンマズシのつもりですが、お口に合いますかどうか」と遠慮がちにすすめられ、その熱いおもてなしの心に感激した。

実りの多かった旅

今回のブラジル訪問のハイライトは、戦後移住の出発点となった松原入植地と、今も多くの県出身移住者が住んでいるドラードス市を訪ね、開拓時代を知る同胞と交流することができたことだ。

かつては開拓前線の小村にすぎなかったドラードスが半世紀の後、20万人の都市となった。その発展の一端を担った県出身移住者たちが、遠路和歌山からやって来た大勢の同胞とにぎやかに歓談している。真面目一本で苦難を乗り越えた人たちの、明るくおだやかな笑顔が印象的だった。

飛行場のある州都カンポグランデ市からドラードス市まで、車で延々4時間にわたって地平線まで続くトウモロコシの



ドラードスの祝賀会で谷口会長と歓談

大農場や牧場の風景が続く。その光景は圧巻だが、実はこのブラジルの内懐ともいえる大穀倉地帯の大半は、つい半世紀ほど前まではうっそうとした原生林だった。

それを切り開いて、今日の「南半球のパン籠」とも言える大穀倉地帯に変えた歴史的な事業に、私たちの身近な同胞が一役かっていたのだ。

今回の旅は、そうした開拓時代から腕一本で人生を切り開いてきた先人の思いにふれる貴重な体験となった。

さらに、第1世代の方々が地域をあげてしっかりと子弟教育を行ってきたおかげで、ドラードス地域の日系社会には、実に立派な後継者が育っていることが確認された。

第2世代の方々もブラジル社会の信頼が厚く、各界の中枢に食い込んでいる。ほどなく開拓を主導した第1世代の方々は第1線を退くであろうが、第2世代の方々がその後

を継いで日系社会の指導者として、また日本の同胞との交流の中核的な担い手となって
くれる筈だ。

私たち日本側でも、そうした若い方々と今後も交流を続けられるような環境を作って
いかなければいけない。そういう思いを強くした旅となった。 (了)